

創年の社会参画を前提とした学習機会の提供事業に関する一考察

—まつど生涯学習大学専攻科を中心として

清水 英男

はじめに

社会教育法第3条では、我が国と地方公共団体の任務として、「すべての国民があらゆる機会、あらゆる場所を利用して、自ら実際生活に即する文化的教養を高め得るような環境を醸成するよう努めなければならない。」と定めている。その環境醸成の一環として、地方公共団体における教育委員会事務局や公民館などの社会教育行政は、学習機会の提供事業(以下「学習機会の提供事業」という。)を行っている。また、教育産業や学習ボランティアグループなど民間が行う多種・多様な学習機会の提供事業も奨励し支援している。

このような学習機会の提供事業の受講者数は、年々増加している。また、その学習内容・方法なども多様化している。さらに、学習プログラムについても、対象住民の学習に関する意識・行動調査の実施や立案者を住民から公募するなど学習ニーズの把握と学習者の視点に立った企画・運営・評価に努めている。その結果、託児サービスをはじめ、土・日や17時以降に実施する学習機会の提供事業が年々増加している。このような住民主体の学習機会の提供に務めていることが、受講者数を増加させている要因の一つといえよう。

一方、今日のような厳しい財政事情の中にあって、学習機会の提供事業のあり方が問われている。例えば、行政評価において、費用対効果という観点から「社会教育行政の学習機会の提供は、特定の住民の趣味・教養の向上や健康の維持増進などに公費を支出しすぎる。」という問題提起などである。

しかし、社会教育行政は、現時点でも、住民が学習活動や人生経験などで得た成果を多くの人の幸せづくりや地域社会の活性化へ結びつける取り組みを積極的に支援している。これらの取り組みについては、住民が主体者となって地域における生涯学習社会を形成する(以下「生涯学習による“まちづくり”」という。)うえでも極めて重要であり、

その効果的な方策を構築することが喫緊の課題となっている。

これらの課題に対処するため、受講生が学習の成果を活用して地域活動に参画することを前提とした学習プログラムの研究を行っている。具体的には、「まつど生涯学習大学専攻科」を事例研究の対象とし、平成16年から17年の2年間にわたり、松戸市公民館のご尽力と「まつど生涯学習大学専攻科」(以下「専攻科」という。)の受講生(以下「受講生」という。)の皆様のご協力を得てすすめている。ここでは、これらの研究の一端を紹介することにした。

なお、ここでいう創年とは、NPO法人「全国生涯学習まちづくり協会」が提唱している「地域のために自らの力を発揮し、創造的に生きる大人の新しい呼称」とした。つまり、従来の「高齢者」や「団塊の世代」などと呼ばれている中高年者の中で、生涯にわたって生きがいを持ち、自らの知恵や能力を地域に生かすなど積極的な生き方を主張し実践する人々を創年とした。

1 まつど生涯学習大学専攻科の概要

(1) 松戸市の概要

松戸市は、千葉県北西部に位置し、江戸川をはさんで東京都と埼玉県に隣接している。市の北側は流山市、東側は柏市、南側は鎌ヶ谷市と市川市に接し、西側は江戸川を境に東京都葛飾区と埼玉県三郷市に接している。市域面積は61.33km²で、東西11.4km、南北11.6kmとほぼひし形の広がりとなっている。

松戸市は、水戸街道の宿場町として、また、舟運交通の要衝として栄えてきた。市制を施行した昭和18年の人口は4万人程度であり、昭和30年代の半ばまでは農業主体のまちとしてゆるやかな人口の増加傾向をたどってきた。その後、急激に膨張する首都東京の住宅需要の受け皿として、新しい市民が全国各地から移り住み、激しい人口移動と増加を繰り返してきた。

平成17年4月には、世帯数194,654世帯、人口473,187人を擁する全国でも有数の生活都市として成熟期を迎えつつある。（「松戸市基本構想」と「2005生活カタログ」による。）

(2) 松戸市公民館の概要

平成17年度の松戸市公民館では、松戸市教育委員会の方針に基づき、子どもからお年寄りまで、「生涯を通じて、必要なときに必要なことをだれでもが楽しく学べる公民館」を目指して、「市民の学習意欲に応える」、「家庭教育のあり方を学ぶ」、「市民同士のつながりを大切にする」を中心に、地域の人々のふれあいと市民の様々な学習活動を応援している。

具体的には、館長をはじめ8名の専任職員によって約14の分野にわたる主催事業と学習グループ・サークル支援事業を企画し運営・評価などを行っている。また、矢切公民館とタウンスクール根木内の施設貸し出し事業も実施している。平成16年度は、111の講座数で述べ参加者数は23,139名であった。また、イベントは、7日間で28団体延べ2,000名が参加した。

(3) まつど生涯学習大学とは

「まつど生涯学習大学」は、公民館の主催事業として、60歳以上の方を対象にし、自らの生活課題や社会的課題に即した学習を基に、地域の主体的行動者となることを期して開設している。定員を400名とし、毎年5月から翌年3月までの間に、1回約2時間程度の学習を約18回開催している。

(4) まつど生涯学習大学専攻科とは

松戸市公民館は、「まつど生涯学習大学」修了者を対象に、平成13年度から「学習を行動に移すために必要な力、実践力を培う」ことを目指した「まつど生涯学習大学専攻科」を主催事業として開設している。毎年、学習テーマを定め、定員を30名とし、9月から翌年の3月までに、1回2時間の学習を13回程度実施している。

2 平成16・17年度まつど生涯学習大学専攻科の概要

(1) 開催趣旨

平成16年度と17年度は、「自分たちの“まち”は自らの手でつくり育てる。」という理念のもとに、専攻科の受講生が学習の成果を地域で活用しグループ活動が展開できるような力量や実践力を培うことを目標にした。

開催の趣旨は、受講生が松戸市のよさを見つけ磨きあげ

るという考えのもとに学習や研究を行い、これらの成果を生かし実践する自主グループを受講後につくりあげることとした。そのため、以下のような学習プログラムを設定した。

なお、平成16年度の受講生は33名であり、平成17年度は27名となった。

(2) 主題

専攻科の主題を「“まち”づくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて」とした。その理由は、受講生が、松戸市のよさを再発見し、楽しみながら学習や研究を積み重ねるなどして磨きあげる。これら磨きあげた松戸市のよさを、より多くの市民が知り・学び・愛しむことを支援できるような方途をつくりだすことを期待したからである。

(3) 呼吸する学習プログラム

平成16・17年度の専攻科の「“まち”づくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて」という学習プログラムは、受講生全員が共通に学習する内容・方法と受講生自らが設定した班別による内容・方法を取りいれている。その概要は、以下の通りである。

平成16年度の学習プログラムは、まず、学習の成果や長い人生の中で体得した生活経験などを生かして取り組む生涯学習による“まち”づくりの意義や方法などについて講義を行った。その後、受講生が、松戸市のよさを話し合い、学習・研究の対象となり専攻科終了後グループ活動として実践することが期待できるテーマを設定した。各受講生は、自らが興味関心をもつテーマを選択し班を編成した。そして、各班が、自らのテーマに関する学習や研究を行うためのプログラムや内容・方法などを企画・実行し、その成果を発表した。

平成17年度の学習プログラムは、平成16年度の班別による学習・研究の成果を更に深めることに力点を置いた。また、専攻科終了後の自主グループの結成と活動の活性化を目指した。これらの学習や研究の成果をレポートとしてまとめ、発表の機会を提供することとした。

この2年間にわたる全員と班別で学習・研究するプログラムは、受講生の興味・関心や学習・研究の進展などに柔軟に対応できるよう配慮したものとなっている。特に、班別の学習や研究のプログラムは、受講生の興味・関心の度合いや探求する程度、あるいは研究テーマの方向転換などによって再編成し実施できるのである。まさに、学習プログラムそのものが生きていて、受講生の学習意欲や研究の方向などに即したものとなるよう柔軟に対処できるのであ

る。つまり、このような学習プログラムは、学習プログラムの人間化、呼吸する学習プログラム(以下「呼吸する学習プログラム」という。)といえよう。

呼吸する学習プログラムを導入した学習機会の提供事業は、今後ますます重要視されなければならない。しかし、現時点では、行政の主催事業としてなじまないと判断される場合が多いといえよう。例えば、予算要求などにおいても、財政セクションから「講師名も回数もあいまい、完全実施もあやぶまれる不透明な予算要求」といわれかねない。

松戸市公民館では、新しい学習プログラムの開発を目指し、呼吸する学習プログラムを導入したのである。また、主題は、「“まち”づくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて」とし、受講生の2年間にわたる学習と研究が終了した時点で、ストレートに地域活動を行うグループの結成に結びつく内容・方法などとしたのである。

(4)平成16年度学習プログラム

開催時期は、平成16年9月8日から平成17年1月12日までの水曜日11日間とした。また、開設時間は、13時30分か

表1 平成16年度の主な学習プログラム

回	開催日	学習・研究内容	講師
1	9月8日	開校式・オリエンテーション 基調講演「生涯学習による“まち”づくりを考える」	聖徳大学教授 清水英男
2	9月15日	私の地域活動の現状と課題 (自己・団体紹介と地域自慢)	
3	9月22日	講義「“まち”づくりを楽しむ方法」	
4	9月29日	演習「ワークショップのすすめ方」(班編成、NASAゲーム)	
5	10月13日	演習「班別仮テーマの設定」	
6	10月27日	現地学習(班別活動)	
7	11月10日	現地学習(班別活動)	
8	11月24日	現地学習のまとめ(班別発表) 講義「学習成果を生かした地域活動の現状と課題」(VTR「学習プログラムの立案」)	
9	12月8日	班別演習(ブレインストーミング、学習プログラムの素案づくり)	
10	12月22日	班別演習(学習プログラムの立案)	
11	1月12日	1年間のまとめ(学習の成果や課題を班毎に発表、質疑応答、全員協議)講評、4月から6月の自主的学習活動(6回)の計画づくり	
／	2月24日	まつど生涯学習大学における「学習成果の発表」	

ら15時30分を原則とした。

平成16年度の主な学習プログラムは、表1のとおりである。それらの中で第5, 6, 7回目と10回目は、呼吸する学習プログラムといえる。

(5)平成17年度学習プログラム

平成17年度の学習プログラムは、前年度に3班(①街路樹ルネッサンス, ②松戸の城再発見, ③まつどの文化財を知らせる)に分かれて実施した学習や研究の成果を生涯学習による“まち”づくりに生かす方法を明らかにするための学習や研究を行うこととした。そのため、前半(4月から7月)は、各班とも独自の学習や研究を行い、後半(9月から12月)は、同一の学習内容とした。したがって、前半は、各班ともそれぞれ必要な講師を配置した学習プログラムをつくり実践した。表2は、その主な学習プログラムである。それらの中で、第1回から4回まで、第6回から9回

表2 平成17年度の主な学習プログラム

回	開催日	学習・研究内容	講師
1	4月13日	今後の学習・研究活動のすすめ方	聖徳大学教授 清水英男
2	4月27日	松戸市内の城址について (2班)	戸定歴史館職員
		まちづくりにおける街路樹の役割と課題(1班)	千葉大学助手 近江慶光
3	5月11日	班別活動(現地調査, 研究等)	
4	5月25日	松戸市の街路樹について 班別活動(現地調査, 研究等)	緑と花の課職員
5	6月8日	全体会(各班の研究成果の発表, 質疑応答, 全員協議)	聖徳大学教授 清水英男
6	6月22日	班別活動(現地調査, 研究等)	
7	7月13日	班別活動(縄文時代の文化財と地形の関係)	千葉大学助教授 百原 新
8	9月14日	班別活動(現地調査, 研究等)	
9	9月28日	班別活動(現地調査, 研究等)	
10	10月12日	班別活動(現地調査, 研究等)	
11	10月26日	全体会(各班の研究成果の発表, 質疑応答, 全員協議)	聖徳大学教授 清水英男
12	11月2日	講義「NPO法人の現状と課題(NPO法, VTR, パワーポイント)」	聖徳大学教授 清水英男
13	11月16日	演習「NPO法人づくり①」 (パワーポイント)	聖徳大学教授 清水英男
14	11月30日	演習「NPO法人づくり②」 (パワーポイント)	聖徳大学教授 清水英男
15	12月14日	全体会(各班の研究成果の最終発表, 講評)	聖徳大学教授 清水英男
	1月26日	生涯学習大学「いきいきまつど元気人」での発表	

までは呼吸する学習プログラムとなっている。

(6) 班別学習・研究活動の成果

ア 班編成と学習・研究テーマ設定の経緯

平成16年の第5回目(10月13日)の学習プログラムにおいて3つの班を編成し、班毎の学習・研究のための仮テーマを設定した。その後、2回にわたり現地学習を行い、第8回の学習プログラム(11月24日)で「現地学習のまとめ(班別発表)」を行った。その結果、1班は「松戸市の街路樹についての研究」、2班は「松戸市中世の城址に関する研究」、第3班は「松戸市の文化財の標柱に関する研究」という仮テーマがつけられた。

これら仮テーマを実施する班を編成し、受講者が希望する班に所属できるように再編成を行った。そして、班毎に学習・調査・研究を進めて今日に至っている。

これら班毎の学習・研究活動の進捗状況をはじめ、成果

や課題などを明らかにするために、表1や2のように「各班の研究成果の発表」を全体会として実施してきている。

イ 平成16年度の成果

平成16年度の成果としては、各班の1年間の学習・研究の結果をまとめた報告書がある。また、平成17年1月12日に実施した「1年間のまとめ(学習の成果や課題を班毎に発表、質疑応答、全員協議)」や平成17年2月24日に行った「まつど生涯学習大学における『学習成果の発表』」での発表などである。

中でも、まつど生涯学習大学における研究の成果の発表は、次のような要旨に基づいた口頭での発表をはじめ、写真による展示や地図の作成、個人的な質問への応答など各班が創意工夫を凝らしたものとなり、まつど生涯学習大学の受講生から高い評価を得た。

別紙1

平成16年度学習報告書

第1班 勝山 亮

第1班 班名「街路樹ルネッサンス」とする

(1) 何を対象に学ぶか討議した。

全員の意見が一致したのは、街路樹(並木道)を調べること。

(2) 昨年中に行ったのは代表的街路樹の実地調査をしたこと。

松戸市の管理する街路(延長約71km, 104街路)樹木数(11,147本)である。
その中の気付いた場所

(3) 今後の活動目標

- ① 街路樹のあり方を考える。
- ② 街路樹の活性化を考える。
- ③ 街路樹の効用、活用を考える。
- ④ 市の街路樹全体を調べて、街路樹マップを作成する。

(例：街路樹歴として、木の若葉、花、紅葉の見頃の日などを市民に知らせる。)

(4) 班員氏名

安彦和子, 天野真美子, 安藤五郎, 岩本栄輔, 瓜生則男, 大柳茂, 長田和治, 柿沼由三, 勝山亮, 金子雄二, 久保長行

平成17年2月24日

平成16年度 まつど生涯学習大学 専攻科
「松戸の城再発見(小金城を中心として)」

城発見隊
班長 堺建
報告 坂田収司
(班員 8名)

1. はじめに

・受講して

平成16年9月8日この講座を受講して、清水先生のご指導のもと当初11名の班員が開催目的、趣旨、進め方など講義を受けた。

「まちづくりを楽しむ方法～まつど再発見に向けて」

をメインテーマとして勉強した。

先生から「松戸の宝物はなにか、夢をさがそう」のお話から全員で協議を重ねた。(班員8名に)

・地域自慢

・ふるさと検地 など話し合いを行った。4回程の講義の中から松戸にお城があった話が出てこれを宝物にしようと纏めた。

2. お城の話し学習

・小金城があった事はほぼ全員が知っている。

・H16.11.10小金城址の現状確認を行った。

・以降お城の調査をテーマとして検討を重ねた。

・現在 小金城の図面は無く、配置図のみ戸定館にあった。

・他班の意見も参考にして 12.8.以降もっと検討した結果松戸には他にもお城があったことが解った。

・調べた結果市内に14のお城(城、館、砦も含めて)があった。

3. 「14のお城」(数字は築年、遺構、城主)

◎相模台城 1452 北条長時

○支城 ・松戸城 1452 高城筑前守 (戸定邸の所らしい)

・根本城 1573 腰郭 高城播磨守

○上本郷城 ? 土塁 空堀 (明治神社の所らしい)

○中根城 ? 1264 千葉頼胤(小さな城 館か砦)

○馬橋城 ? 1264 千葉頼胤 (小さな城 館か砦)

◎根本内城 1462 土塁 空堀 高城胤忠

○支城 ・栗ヶ沢城 1460 高城胤忠

・行人台城 1460

◎小金城 1537～90 郭 土塁 空堀 高城胤吉

○支城 ・幸谷城 1537 土塁 高城胤吉

・殿平賀城 1537 土塁

・中金杉城 ? 1538 高城胤吉

・幸田城 ? (砦らしい)

以上本城、支城など14城が史実により解った。

現在は小金城址が有るのみで他はその姿形は何も無い。

小金城にしても北小金駅より歩いて達磨口跡、大勝院北川石垣を通り大谷口歴史公園付近(ここに土塁、畝堀などがある)小金城址駅方面に出て始めてここに城があったと思える。我々はこの城があったというロマンを求め

て勉強をしています。

・注：支城は外城(トジョウ)ともいう。

松戸城は相模台城の外城(ドジョウ)→戸定邸

4. 今後の活動

1. 城シリーズの簡単な資料作成
2. 高城氏の系図の調査
3. 道標、案内板の設置と観光マップの作成(行政への提案)
4. 観光説明マニュアルの作成
5. 観光案内のボランティアの検討

以上次年度の課題として取り組む(予算などのもんだいが有るが)

別紙3

平成16年度まつど生涯学習大学専攻科学習報告書

第三班 松本源次郎

一. 何を学んだか。(いろいろ教えていただいたことを自分なりに纏めてみました)

1)生涯学習によるまちづくりとは

このまちで生まれ・育ち・学び・暮らすすべての人が「このまちで過ごせて本当に良かった。」と思えるまちにしようという市民の活動と、そのための学習です。

2)まちづくりの特質 市民と行政の新たな関係

- (1)自分でできることから行動を起こす・・・自助
- (2)仲間を集めて力を合わせる・・・共助
- (3)行政の力が必要なときは合体して行う・・・協働

3)“まちづくり”をすすめる視点(市民が主役)

- (1)市民が中心となり、行政と協働してまちづくりを行う・・・(気運の醸成)
- (2)市民自らが積極的に学習活動を行い、その成果を生かして気軽に自分に出来る身近なことからまちづくりに参画する。・・・(実践活動の展開)

以上を要約してキーワードは「実践」(とにかく出来ることから行動を起こす。障害を乗り越えるために学習する。周囲に働きかけて力を合わせる。)であることを学びました。

二. 何を実践したか

私たちは誇れる地域の再発見と再生創造のために「まつどの文化財を調べる」を班の名前にしました。

何で 私たちは全員が松戸のことをもっとよく知りたと思っていた。まつどのことをもっと良く知って、まちおこしのパワーにしたい。

何を まつどでは縄文時代初期から活躍していた先人の遺跡が発掘されている。近代まで江戸を支えた地域として数々の史跡がある。

市内には国の重要文化財5・県の指定文化財6・市の指定文化財33がある。

そのほかに市の教育委員会が管理している文化財標識柱138もある。

どうするか

これらの文化財をもっと市民の身近なものにするにはどうしたらよいか

私たち自身がまずよく調べて文化財を理解する

市民が馴染めるように分類・整理する。

今までにしたこと

博物館で文化財についての基本的な概念を研修した。

文化財標識柱138の説明文を集めた。

教育委員会の資料や現場の調査で正しい説明文を 種類別・年代別に分類しA4判16ページに纏めた。

三. 来年度はこれらを土台に「まつどの文化財を知らせる」活動をしたいと思います。

四. 職員氏名 中村 功・中村 福八郎・羽川 遼一・萩原 光夫・福井 洋子・松戸 寿子・松本 源次郎・山中 健司・結城 とも・吉田 正春 以上

ウ 平成17年度の成果

平成17年度の成果は、12月14日に平成16年度と17年度の学習・研究をまとめた報告書を作成することとしている。また、10月26日に「全体会(各班の研究成果の発表, 質疑応答, 全員協議)」を行った。その発表要旨は、次の

とおりである。なお、平成17年12月14日に「全体会(各班の研究成果の最終発表, 講評)」を、また、平成18年1月26日にまつど生涯学習大学で平成「いきいきまつど元気人」での発表などを予定している。

別紙4

平成17年度学習報告書 まつど生涯学習大学専攻科(第1班)：『街路樹ルネッサンス』《概要》

1. 学習の目的：

自然豊かで、草木、草花に囲まれている環境がどんなに私たちが癒してくれることか。そしていま住んでいる街のあちこちにある樹木、またその並木路の街路樹は景観ばかりでなく多くの機能と効用を私たちに与えてくれる。特に身近にある樹木が本来なれば十分花咲いてもよい物が咲いていない、その寂しさは例えようもない。

私たち松戸市には街路樹がおよそ28種樹、12,332本ある。全国的に有名な常盤平のさくら通りの桜並木以外にもすばらしい街路樹があるにもかかわらず、十分花咲きを楽しんだり、多様な樹木の姿を私たちの日常生活に上手に取り入れているようには見られない。

そこで『松戸市緑の基本計画(平成10年)』の標語にある「暮らしが自然と調和する緑のふるさと 松戸」にふさわしい松戸の“街路樹ルネッサンス“、街路樹革新運動を目指して学習を推進する。

また街路樹はそこに住む人たちの出会いや交歓の喜びを媒介してくれるメディアであり、舞台でもある。私たちはそれから生まれるパワーをもう一度見直し、市民参加を基とする、街路樹との共生、かつ共楽することを理念に学習する。

2. 具体的活動内容：

1) マロニエ(トチノキ)の花が咲かせる

2) 定点観察：

①松戸地区：松戸本町大通り

②常盤平地区：けやき通り・えんじゅ通り・ゆりのき通り

③新松戸地区：けやき通り・夾竹桃通り・栃の木通り・栃の木公園

3) 活動記録：

3. 街路樹を楽しむ：

①名札を付ける

②トチ餅とマロニエの歌

③CDを作る

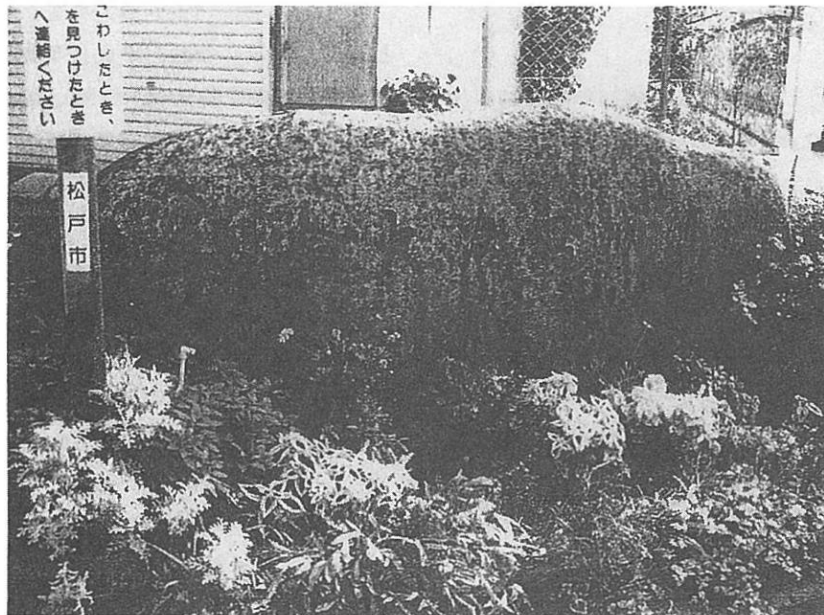
4. 学習の感想：

5. おわりに：活動は終わらない

《第1班メンバー》：安彦和子、天野真美子、安藤五郎、岩本榮輔、瓜生則男、勝山亮、金子雄二、久保長行(大柳茂、長田和治、柿沼由三)。 以上

別紙5

「松戸の城再発見（小金城を中心として）」



城発見隊

小暮彦市 堺 建 坂田収司 佐藤 健
澤出榮次 白石昌明 高瀬 怜 滝口重夫

(敬称略 発音順)

平成16年度 まつど生涯学習大学

専攻科第2班

目 次

1. はじめに
2. 松戸を中心とした中世東葛地区の歴史背景
3. 高城氏最盛期の活躍
4. 松戸14城のあらまし
5. 城再建の困難な理由
6. 城の主な用語集
7. 見学ルートと関連遺跡
8. 案内板に関する考察
9. 城発見隊活動に当たっての苦労話
10. まとめ

城発見隊の詩

流れも清き江戸川に	城の痕跡求めて歩く	朝日に映える戸定邸
霞む筑波の嶺嶺も	心に残る小金の城も	かつては松戸城跡か
松戸の台地様々に	ああ幻か堀だけか	わずかな望みに心は躍る
季節の花もここかしこ	形さがして東に西に	小高い丘にやさしげに
我ら城のさがし人	肩を落としてとほとほと	吹いてる風に花の香も
集って精進その日々を	戻る背中に夕日が痛い	疲れた心癒すのか
重ねて止まんこの心	ああこの虚しさは何だろう	ああ我ら城の発見隊
在りし昔の城いずこ		終わりは無きの心意気

1. はじめに

平成16年度まつど生涯学習大学専攻科のメインテーマ「まちづくりを楽しむ方法 ～ まつど再発見に向けて」に
関して、第2班では「松戸の城再発見(小金城を中心として)」をテーマに調査研究を実施した。

流山電鉄に「小金福祉」駅があることはメンバー全員が知っていたが、小金城の歴史的背景やその城郭の雄姿を見
たいと言う意見から、「城発見隊」と命名し資料収集や現地探索を実施した。しかし城があったと思われる場所もそ
の遺跡が少なく、またマンションや戸建住宅になっていて、当時の面影を十分思い知ることが出来なかった。

そこで専門家の話を聞いたところ、土地の立体模型はあるが城郭の絵図は全く存在しないとのことで、残念ながら
当時の城再現は不可能となった。尚千葉県内においても城跡に天守閣様建築物が垣間見られるが、当時の中世城郭に
は天守閣が無く、近世を模して博物館や展望台などの観光目的で新しく建造したものとなっている。

一方小金城主高城胤吉氏の隆盛を誇った歴史的背景を追ううちに、その関連として松戸市に14の城があったこと
に驚くと共に、「松戸の城再発見」の平易な紹介資料を当班の活動成果とし、松戸市民とくに若い世代に興味を持っ
てもらい、まつど再発見に多少なりとも貢献できたらと願っている。

添付資料

- 第2班活動経過(平成16年度前期)
- 第2班活動経過(平成16年度後期)
- 松戸市内中世城郭14城の相関
- 小金城主高城胤吉系譜
- 外観図の無い日本の城の復興例

10. まとめ

1) 城の魅力と歴史遺産としての整備の必要性

城の魅力とは、それがふるさとの象徴となるからであろう。テレビや映画においても舞台となる土地の紹介場面で、
最初に出てくるのが城や城跡であったりすることからも明らかである。

すなわちその土地が現在に至るまでには、城を舞台にした様々な人間ドラマが展開されてきた結果である。従って
それが気軽な探索であったりしても、城は時代の政治・経済・産業・文化を背景とした壮大なロマンを回顧する歴史

の生き証人であろう。

従って城跡の保存が言われる中で、標識柱や案内板の充実や遺跡の保存状態が必ずしも良好とは言えず、都市化の波に押され宅地化が進み、当時の面影さえも垣間見られない場所も少なくなく、真に残念である。

近所の住民においてもその存在を知らなかったり、年配者もその記憶が定かでない現状を見るにつけ、遅ればせながら大切な歴史遺産の整備を加速させ、松戸市の象徴としてその文化財の充実を痛感するものである。

この度の活動としては現状の認識と、中世14城存在にまつわる歴史背景について平易にまとめ、案内図を含めた歴史散歩の資料案とし、抜き出して活用できるようにまとめたものである。

今後は行政のみならず企業や地域住民を含めた市民全体の活動として、荒廃予防、標識柱・案内板の充実、見学路の整備をし、城シリーズとしての見学ルートマップの発行及び歴史背景としての関連神社仏閣の紹介も魅力的である。

2) 観光拠点である小金城の再建の可能性

現在松戸市の文化財である小金城においては、松戸14城の中核をなすものであり、今回の活動においても当然のことながら城郭としての再建の可能性について追求した。しかし残念なことに建物の図面が全く現存せず、仮にビジュアルな象徴とするにも印象的な天守閣は当時存在していないこともあり、結局は観光目的の架空の模擬城となる。

しからは今後の問題として、若者を含めた集客力のある魅力のポイントを明確化し、再建の規模と採算性をどう位置づけ、どう運営するかが重要である。施設内の充実を含め、交通機関としての最寄り駅や周辺地域の協力も欠かせない。

3) NPO法人の可能性

このたびの「松戸の城再発見」に関連したNPO法人の立ち上げに関しては、特に魅力ある目的の明確化と事業内容・採算性の検討が必要である。しかし少なくとも小金城を中心とした北小金駅ルート及び松戸城を中心とした松戸駅ルートの整備充実が必要であり、観光案内ボランティアやお土産の販売などもあるが、何よりも松戸市博物館との関連が重要である。

いずれにしても法人を立ち上げるには、解決しなければならない問題が山積しており。本件の検討については、事業推進に興味のあるメンバーの募集など、別の機会に譲りたいと考えている。

以上

別紙6

松戸市の文化財標識柱について

昨年は松戸市に市の教育委員会が管理する文化財標識柱が131ある(リストに載っているのは138だが、そのうち4箇所は既に撤去されている。また同じ説明文が二箇所に出ているものが2件あり、1件は文化財を守ろうと言う標識だから現存する文化財としては131になる)ことを知り、その説明文を別添のとおり一覧表に纏めた。

教育委員会に提供してもらった説明文は不備なので、山中さんが調査したデジカメの映像で添削した。今年度はこの資料を中心に「松戸市の文化財」を市民に知らせる活動をしようと考えた。現在までの活動の中でこれからは次のように纏めてゆきたいと思っている。

一・文化財標識柱の意義を再確認するように、その維持管理について市当局に提言したい。

現在の標識柱は、ただ説明文が書かれているだけで市民にアピールする努力が見られない。

電話ボックスや電柱の陰になっていたり、私有地の中だったり目に触れにくい。

文化財そのものの名称が間違っていて記載されている。

二・131の標識柱を文化財の概念(文化活動の客観的所産としての諸事象または諸事物で文化価値を有するもの)で分ける。(文化財保護法の対象)

- 1)有形文化財
- 2)無形文化財
- 3)民俗文化財
- 4)記念物
- 5)伝統的建造物群

これらは明確に区分できないものもあるけれど私たちの主観で分類してみる。

更に 6)年代別に分けてみる

また 7)地域別に分類する

三・131を6のブロックにわけ、地図上に標識柱の番号をプロットして、1)~7)の考察によって市民が松戸市の文化財に親しめるよう二の説明文を添付し手引きにしたい。

三班 中村 功
 中村 福八郎
 福井 洋子
 松戸 寿子
 松本 源次郎
 山中 健司
 結城 とも
 吉田 正春

3 受講生と班役員を対象とした意識・行動調査の概要

本調査は、創年の地域活動を促進する学習機会の提供事業のあり方を明らかにするための参考資料を得ることにある。また、専攻科の主題の設定や班活動にかかわる呼吸する学習プログラムなどの改善に資することを狙いとした。

(1)受講生の意識・行動調査の概要

この調査の目的は、専攻科の受講者の学習・研究活動に対する意識・行動を明らかにすることにある。そのため、学習プログラムの前、中、後期と3回に分けて実施した。その概要は、以下のとおりである。

ア 第1回調査の概要

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の受講生33名(悉皆)
- ②回収結果(回収率)：24名(72.3%)
- ③調査の実施方法：集合調査
- ④調査実施日：平成16年10月27日(水)
- ⑤調査内容：別添資料1「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査(平成16年10月27日)集計票」のとおり。

イ 第2回調査の概要

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の受講生27名(悉皆)

- ②回収結果(回収率)：19名(70.4%)

- ③調査の実施方法：集合調査

- ④調査実施日：平成17年2月9日(水)

- ⑤調査内容：別添資料2「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査(平成17年2月9日)集計票」のとおり。

ウ 第3回調査の概要

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の受講生24名(悉皆)

- ②回収結果(回収率)：15名(62.5%)

- ③調査の実施方法：集合調査

- ④調査実施日：平成17年10月26日(水)

- ⑤調査内容：別添資料3「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査(平成17年10月26日)集計票」のとおり。

(2)班役員の感想・提言調査の概要

本調査の目的は、受講生が専攻科を終了後に自主グループを結成し活動できるための学習内容・方法や班別活動などのあり方を明らかにすることである。そのため、各班の役員を調査対象として、集団維持機能や目的達成機能などの現状と課題、提言などについて記述式で回答を得た。

- ①調査の対象(抽出方法)：専攻科の班役員9名(各班3名)

- ②回収結果(回収率)：8名(88.9%)
- ③調査の実施方法：集合調査
- ④調査実施日：平成17年10月26日(水)
- ⑤調査内容：別添資料4「平成16・17年度まつど生涯学習大学専攻科『まちづくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて』班役員の感想・提言調査(平成17年10月26日)集計票」のとおり。

4 調査結果の概要

(1)受講生の意識・行動調査結果の概要

ア 属性

今回実施したすべての調査の対象者は、平成16年度と平成17年度の「まつど生涯学習大学専攻科」を継続して学習・研究を行った受講生である。これらの受講生は、60歳以上の市民を対象にした「まつど生涯学習大学」を修了したことが受講の条件になっているのである。

この専攻科の受講生の性別は、全受講生33名のうち女性は5名であり、男性が28名(84.4%)と圧倒的に多数を占めていた。第1回調査の回答者は、男性が19名(79.2%)であり、女性は5名(20.8%)であった。また、第2回調査では、男性が16名(84.2%)、女性が3名(15.8%)であった。さらに、第3回調査では、男性のみ15名(100.0%)であった。

年齢は、60歳から70歳未満が約7割、70歳以上が約3割であった。但し、第3回調査の回答者では、60歳以上70歳未満が53.3%、70歳以上が46.7%であった。

職業については、約9割が無職であり、約1割がパートタイムで仕事をしている。

イ 専攻科の受講者募集の周知方法と受講動機

第1回調査(平成16年10月27日実施、全回答者24名を100%とした。)によると、受講者募集を知った受講生の約8割は、市の広報紙(66.7%)と公民館の広報紙(リーフレット)(12.5%)と答えている。また、受講動機は、「自分の意思で参加」が87.5%であった。

これらのことから、受講生像は、広報で情報を得て自らの意思で受講しており、地域活動に対する積極的な参画意識を持った学習者といえる。

ウ 地域活動への参画の状況と参画意欲

ボランティア活動やグループ活動など地域活動への参画状況については、受講生の45.9%[現在行っている(41.7%)と過去に行ったことがある(4.2%)の合計]が「参画した経験があり」、45.8%が「経験がない」と答えている。

参画している活動内容は、福祉、学習、町内会の役員な

どであった。また、経験していない理由は、「活動の内容がわからなかった(36.3%)」と「参加したいグループがなかった(9.1%)」で約5割となっている。「忙しかったから」は27.3%で、「興味がなかったから」は18.2%であった。そして、今後地域活動に参画したいと回答した受講生は、第1回調査で91.6%、第2回調査(平成17年2月9日)では94.8%となった。また、第3回調査(平成17年10月26日)では93.4%となっている。

これらのことから、受講生の約5割が地域活動の経験を有し、約9割強が今後とも参画する意欲を持っていることがわかった。

エ 参画したい地域活動(複数回答)

第1回調査で参画したい地域活動の第1位は「体育・スポーツ・文化に関する活動(33.3%)」であった。第2位は「市民の学習活動支援」、「環境保全」、「社会福祉」であり、いずれも29.2%であった。

第2回調査では、「市民の学習活動支援に関する活動」と「環境保全」がいずれも44.4%で第1位であった。次に、「社会福祉」、「体育・スポーツ・文化」、「公共施設のボランティア」の33.3%であった。

第3回調査での第1位は、「環境保全に関する活動」の61.5%であった。第2位が「社会福祉(38.5%)」、第3位が「体育・スポーツ・文化」、「青少年の健全育成」、「市民の学習支援」の23.1%であった。

受講生は、学習・研究活動がすすむにつれ、専攻科の目的としている方向を踏まえながら、参画したい地域活動と班活動のテーマが整合性をもつようになってきているといえよう。例えば、すべての調査で「市民の学習支援に関する活動」が3位以内となっている。また、2つの班が環境保全にかかわりが深い学習・研究を実施している時期に行った第2回と第3回調査では、「環境保全に関する活動」が1位となっていることなどである。

オ 専攻科で学習活動を継続している理由

第1回調査の時点で継続して学習している理由の第1位は、「地域社会に役立つ活動を行うため(45.7%)」であり、第2位は「自分の可能性を高めるため(25.0%)」であった。

また、75%の受講生が、専攻科の学習が役に立っている「非常に役に立っている(20.8%)、ある程度役に立っている(54.2%)」と考えている。

これらのことから、約7割の受講生は、「専攻科での学習が自分の可能性を高めながら地域社会に役立つ」と考えて受講しているといえよう。

カ 専攻科の学習内容・方法の有効度(複数回答)

専攻科の学習が役に立っていると回答している受講生は、第1回調査で75%であったが、第2回調査では94.7%となった。第3回調査では、班別学習に限定したが100.0%であった。

また、役に立った学習として、第2回調査では「集団による意思決定の技法と演習(94.4%)」が第1位であり、第2位が「課題発見・解決型の学習・方法(77.7%)」であった。第3位は「現地訪問等の体験学習の技法と学習(66.6%)」であった。

第3回調査では、第1位が「課題発見・解決型の学習・方法」の66.7%であった。また、第2位は、「現地訪問等の体験型による学習の技法」と「班員と友達になれた」の53.3%であった。次が「自分の班のテーマについての研究が深められた(46.7%)」となっている。

これらのことから、学習・研究テーマの進捗状況に的確に対応できる学習内容・方法や技法を選択し実施することの必要性が理解できる。

キ 専攻科終了後の自主的なグループ活動の可能性

第3回調査では、現在の班がグループをつくった場合の参加について質問している。その結果は、「できれば参加したい」が11名(73.3%)と第1位であり、1名(6.7%)の「積極的に参加する」と「その他(グループ構想に賛同できたら積極的に参加する。)」をあわせると13名(86.7%)であった。残りは「参加するかどうかわからない」の2名(13.3%)だけであり、「参加しない」0名であった。

このことから、班員は専攻科終了後のグループづくりをすすめようとしていることがわかった。

(2) 班役員の感想・提言調査結果の概要

ア 調査対象としての班役員

専攻科では、全員が対等な関係で学習や研究活動に参画することを原則とした。したがって、班の役員も、全体を掌握し班の責任者となる班長や副班長などを置かず、班別活動をすすめるために必要な各役割を担当する進行係、発表係、記録係とした。また、これらの係の任期や分掌も固定化せずに、各班が裁量できるようにしている。

これら各班の3係計9名を調査の対象とした。

イ 調査の特色

この調査の特色は、すべての質問の回答を記述式としたことと、各班の変容のプロセスを明らかにするため、問4(専攻科終了後の班の方向性)を除く各質問では専攻科の開

設期間を三つの期間に区分したことである。

具体的には、前半期(平成16年1月から12月)、中間期(平成17年1月から6月)、後半期(平成17年9月から10月)とした。また、この調査に回答された各班の役員1名に対して、同じ調査項目で聞き取り調査を実施した。

この調査結果からは、班編成上の問題点や班(グループ)の結成から活動期にかけての集団維持機能や目的達成機能の状況をはじめ、役員のかかわり方などについて貴重な意見や提言などを得ることができた。

これらの意見・提言を集約すると次のようなことがいえる。なお、これらの意見や・提言は、本稿の「5 地域参画型学習機会の提供事業のあり方」の中で活用している。

ウ 班員の人間関係づくりへの取り組み

人間関係については、各班とも、前半期では各班員の人生観や価値観などの違いが表面化されるなど、ごちない様子がうかがえる。それが中間期になると、目的意識が明確になり相互に理解しようとする協調的な関係が醸成されてきている。また、班内に課題別に学習・研究を行う小グループができた班もあった。後半期では、お互いの性格や特徴などが理解でき、意見交換もスムーズになるなど、仲間という関係づくりができてきている。しかし、班の人間関係や学習・研究テーマに違和感を持った班員がやめているという状況も現出している。

役員が、好ましい人間関係づくりをすすめるにあたって問題と考えたことは以下のようなことであった。前半期では、「一人の班員が一方向的に各係の人選を行うなど独裁的な行為を行ったり、意見が違う班員が班を離れたりしたこと。」などであった。中間期では、「やる気がなくなってきただけの班員が増えてきている。」ことなどである。後半期では、「班の方針に反対はしないが行動もしない班員がいる。」ことなどである。

次に、役員が、班の好ましい人間関係づくりとして力を入れた主なことは、以下のものであった。前半期では、「班員が融和し自由に話し合いができるよう心と心の結びつきを深める努力を行った。」ことなどである。また、中間期は、「関係する学習・研究テーマを共通理解し仲間意識を高めるためにカラオケや試食会など楽しみながら班別活動ができるように配慮した。」ことなどである。後半期では、「仲間意識を高め全員の長所を生かした役割分担を行うなど班を離れる班員を出さないような配慮をした。」ことなどであった。

エ 班の目的達成への取り組み

各班とも班の意思として学習・研究テーマを決定した。班の役員がみたこのテーマの目的達成に関する班員の活動状況や課題と役員自らが努力したことは、次のようなことであった。

まず、班の目的達成への取組状況としては、以下のようであった。前半期では、各班の共通点として「班員各自は意見をだすが集約しようとする班員が少なく、結果として合意法ではなく多数決によって決めている。」ということであった。しかし、前半期の中にあっても、「目的意識を持った班員が多くいて、時間をかけてポイントをはずさずに全員参画して行動できた。」という班もあった。次に、中間期では、各班とも「議論を重ねていくうちに班名や学習・研究テーマが決定するなど方向が見えてきたので班員がまとまってきている。」ということなどであった。しかし、「班の方向性が明らかになったことで、違和感を持つ班員がいた。」という班も見受けられた。続いて、後半期では、全般的に「各班員が積極的に発言し行動するなど役割を果たし、効果的な取り組みができるようになった。」また、「自主的な班活動を実施し現地学習や資料づくりを行った。」という状況になってきた。しかし、「自主的・積極的に行動する班員は多くない。しかし、全員が同調するようになった。」という班もあった。

次に、班役員が目的達成上問題と考えたことは、以下のようであった。前半期は、「全班員が参画し、合意法によって目標を理解し役割分担ができるような話し合いの時間が十分でなかった。」ということ、「連絡なしで欠席している班員がいる。」ということなどであった。中間期では、「ゆっくり時間をかけて話し合うことが正規の授業では足りなかった。」や「役割分担した作業を期日までに行わなかった班員がいる。」などであった。後半期では、「資料作りなど積極的にかかわる班員がいる反面、班内のグループ活動に非協力的・消極的な班員いた。また、班内の小グループでの活動にばらつきがみられた。」ことなどであった。

続いて、班の役員として力を入れたことは、以下のようであった。前半期は、「前回の学習や研究を復習するなどして継続性を持たせたこと。」と「班活動の方向性を明らかにし、班員に役割を分担したこと。」などであった。中間期は、「各班員が目的意識を持って同じレベルで資料作成などの活動ができるよう配慮した。」ことなどであった。後半期は、全般的に「班の学習・研究のまとめなどでの意見の調整に努めたこと。」などであった。また、「専攻科終了後の行動に結びつくようなまとめをしようとし

た。」班の役員もいた。

オ 専攻科終了後の自主グループ結成の可能性

班役員の専攻科終了後のグループ結成への考えは、1班以外は消極的な考えを示している。このことは、86.7%が参加と答えた班員の第3回の調査結果とかけ離れている。

このことについての役員の考えは、次のようであった。A班の役員は、2名が自主グループとして活動することが期待できると回答している。その理由は、班員が「今後続けていく必要がある。」また、「松戸市でなにかをしたいという共通認識がある。」と考えていると推測していることにある。しかし、具体化については「検討を要することが多々ある。」ということであった。さらに、1名が「個人としては活動できると思っているが、班としてはまとめができた後で決定するので、現在はわからない。」と回答している。

B班の役員は、2名が自主グループとして活動できるかわからないと回答している。その理由としては、班員が「専攻科の学習・研究ですべて終了した。」と考えていることや、班活動を進める場合の資金づくりやテーマに関する関連行政や団体との交渉など「課題が山積している。」ことをあげている。また、1名は、「班員の意識やリーダーなどの条件次第で継続か終了かが決まる。」としている。

C班の役員は2名とも、「自主グループとして活動することが期待できない。」と回答している。その理由としては、「自主的に行動できる班員が少ない。」ことや「講義を聴く程度の学習がよい。」と考えている班員が多いことをあげている。

聞き取り調査によると、自主グループの結成が難しいと考えている役員の本音は、「自主グループ活動には、資金づくりや関係機関・団体との交渉、学習や研究の内容に応じた講師の確保など多くの時間と労力を必要とする。これらを企画・運営し評価する活動の中心となる役員には、現在の班員の意識・行動を考えると、さらに過重な負担がかかることが予想される。」ことなどであった。

(3) 調査結果からみた班活動の取り組み状況と課題

これら受講生や役員を対象とした調査と各班の報告書作成の時期は、平成17年の11月末までのものである。つまり、まだ学習プログラムが終了していない状況でのまとめとなっている。ここでは、現時点でこれらの調査結果から、班活動の時間的な流れに応じた動きが見えてきたことについて述べることにした。

例えば、班の好ましい人間関係づくりや目的達成状況に

については、前半期は各班員が仲間として打ち解ける状況になく、発言や行動にも個人プレーが多くグループとして活動することができにくい状況にあったことが理解できた。中間期は班員が融和しつつ協議しながら役割分担や活動の方向性をつくることができたなど班員がまとまって活動を積極的に行うようになったことが推測できた。後半期は各班員が積極的に役割を果たし、まとめのレポートづくりのための資料の作成など効果的な取り組みができるようになりつつあることがわかった。

一方、前半期と中間期での班員の好ましい人間関係づくりの難しさや学習・研究テーマ設定のための時間不足、また、後半期には班員が積極派と消極派にわかれてしまったことや班を離れることへの対応の不充分さなど問題点が多々あることもわかった。

このような人間関係づくりと目的達成が好ましいプロセスをへていることについては、受講生の積極的な学習・研究に対する取り組みと役員の努力に負うことが極めて大きいことが理解できた。

呼吸するプログラムについては、受講生や役員の調査結果から、その趣旨が受講生にある程度理解され実践されたことがうかがわれる。例えば、「十分な学習・研究の時間がとれた。」「資料探しや現地学習などに積極的参画した。」「別途御協議願ったテーマにふさわしい講師の講義から班の研究の方向が決まった。」「学習内容や班活動が役に立っている。」ことなどである。一方、「時間が足りない。」「テーマは主催者が決めたほうがよい。」「班のテーマに興味のない受講者が離れてしまう。」など課題も山積していることがわかった。

専攻科開設の趣旨である専攻科終了後の自主グループの結成については、平成17年11月末の時点で、積極的な受講生側と成果と責任を重視し消極的になっている役員との間にへだたりがあることがわかった。

5 地域参画型学習機会の提供事業のあり方

ここでは、受講生や班役員の調査結果をはじめ、公民館職員や受講生からの普段の聞き取り調査などを考察し、今後の地域参画型学習機会の提供事業の在り方について提言を試みた。したがって、この提言の一部は、仮説段階にある。つまり、専攻科の全プログラムが終了しないなかでの提言ということである。

(1)開催期間とレイ・アウト

開催期間は単年度とし、1回2時間で20回程度(班別活動の10回を含む。)開催することを原則とする。例えば、年

度の早い時期から開設し、一年間を3期に分けるのである。そして、前半期は、すべての受講生が共通した学習活動を実施する。また、中間期は、班別活動のテーマ設定に時間をかけ、班毎に体験学習を実施する。さらに、後半期は、学習と研究の成果をまとめることを中心とする。これらの学習プログラム(自主的班活動を含む。)は、呼吸するプログラムとすることが効果的である。

専攻科終了後は、必要に応じて、自主的なグループ活動を支援する研修や成果の発表の機会を提供することが効果的といえる。例えば、自主グループ活動での課題を解決するための学習や学習の成果を発表し新たな会員を確保するなど、グループ活動の活性化を支援するプログラムが望ましいといえよう。

(2)共通学習の内容・方法

受講生全員が共通に学習する内容・方法は、今回の学習プログラムを基本としつつ、グループ・ダイナミクスやリーダーシップ、集団の維持機能や目的達成機能などを体験的に学習できる時間を多くすることが必要である。

具体的には、表1と表2の主な学習プログラムを以下のように改善することが肝要といえよう。

前半期では、第1回での「生涯学習による“まち”づくりを考える」の2時間を3時間にする。また、第3回と第4回の「“まち”を楽しむ方法」をグループワークの理論と手順を約1時間程度説明し、演習に時間をかけて(約3時間)フィードバックを十分に行えるようにする。さらに、新たに「グループの魅力とグループづくり」などのタイトルで集団の維持機能や目的達成機能などを体験的に学習できる場を約2時間程度設定すると効果的と思われる。

中間期では、11回目の「1年間のまとめと班別による自主活動(平成17年4月から6月までの計6回)のプログラムの発表・協議・講評」を前半(まとめ)と後半(プログラム)に切り離して各2時間程度の時間を設定し十分に協議を行うことが必要である。

後半期では、第1回「今後の学習・研究活動のすすめ方」を効果的に行うことが大切である。例えば、これからの活動を“無理なく、気軽に、できることから”すすめるという視点をもって、仲間と楽しく学ぶ機運を醸成することなどである。また、11回から13回にかけて「班をNPO法人化する講義と演習」では、「各班を必ずNPO法人とする。」という狙いを「できる班はNPO法人へ」と柔軟化して講義や演習の内容・方法を改善が必要である。

(3) 班編成のあり方

受講生が自主的に学習・研究する班別活動を充実するための班編成は、できる範囲で班を多くし、受講生が班毎の学習・研究テーマを選択できる機会を増やすことが望ましい。また、地域別の班編成も考えられる。さらに、班活動を統括する班長をはじめ、副班長や会計などを置き、それら役員のもとで全班員が係として役割を果たす組織を編成することも考慮する必要がある。そして、班役員と主催者、講師が定期的に協議できる場の設定が肝要といえる。このシステムは、人間関係づくりが十分でない初期の段階で効果を発揮する組織といえよう。

今回の専攻科の班編成は、受講生が班を選択し編成する機会を2回設定した。まず、最初のグループワークによる演習や学習・研究テーマ設定時の班編成においては、ゲームなどによって受講生本人の意思を配慮せずにグループ分けを行った。次に、班毎の仮テーマが設定された時点で、受講生自らが学習・研究したい仮テーマを有する班を選び所属するようにした。

この方法は、全般的には目的を達成することができた。しかし、「別の班へ移動することの心地悪さ。」や「学習・研究したい仮テーマがない。」などの理由で、「不本意ながら現班にとどまった。」り「専攻科の受講をやめた。」という課題を残した。これらのことを改善するためには、仮テーマを多くするために班編成を増やすことと、各仮テーマを十分に理解したうえで班選択ができるような配慮が必要といえよう。また、班別の現地調査や専攻科終了後の活動を活性化するためには、受講生の居住する地域を班編成の基準とすることも効果的といえよう。しかし、この方法は、松戸市のような47万人を超える人口と広い面積などを有する大都市において、全市内から応募した33名の受講生では難しいことといえよう。

(4) 班別活動の内容・方法

班別による学習・研究テーマの設定と班活動のプログラム作成には、十分な時間を充当することが必要である。特に、学習内容や学習方法などを盛り込んだプログラム作成は、全班員が納得して決定するという合意法で実施することが望ましい。特に、班員が興味・関心を持った学習内容を追求する過程で学習内容が深化し続けるなど、プログラム自体が変容するという視点をもって柔軟に学習内容を決定することが肝要といえる。

学習方法としては、現地におもむき講師を交えての体験学習を多く設定することが効果的である。講師については、公民館(行政)の協力を得て適任者に依頼することが大切

である。また、班活動を効果的に行う方法としては、全班員が自らの長所を生かせる役割を担当し責任を持って遂行できるようにすることが極めて重要となる。また、班の意思決定にかかわる協議などへの講師の適切なアドバイスも必要である。さらに、班活動に必要な経費に対する公民館の配慮が求められよう。

(5) 地域活動への参画要因

受講生が専攻科終了後に自主グループ結成へスムーズに移行できるためには、班員が積極的に班活動に参画し班役員の負担を軽減することが必要である。また、受講中の班活動では、始めから長期的な計画をつくらず、中・長期的な展望を踏まえながら中期的な目標と1年間の計画をつくるのが肝要といえる。その単年度計画は、気軽に容易に実践できるような内容や方法とすることが大切といえよう。さらに、全員共通で学習する内容と方法は、受講生の班活動に役立つ実学とすることが必要である。

平成16・17年度のまつど生涯学習大学専攻科は、終了後に自主グループを結成し、そこでの学習・研究の成果を生かし、地域社会の人々に“松戸市のよさの再発見”を支援する活動を展開することを期待して開設している。

したがって、自主グループ活動を前提とした学習プログラムを設定した。また、そのプログラムは、受講生の学習・研究の進捗状況や方向性などによって変えることができる、いわゆる、呼吸するプログラムをとりいれたのである。

第3回アンケート調査結果からは、8割の受講生が自主グループに参加したいと考えていることがわかった。一方、三つの班の役員感想・提言調査からは、一つの班のみが自主グループとしての活動が期待できると回答している。また、残りの二つの班は、現時点ではわからないが条件次第では結成が期待できそうな班と、期待できないと回答した班である。しかし、これら二つの班の役員も、期待できない理由として、班員の自主グループ活動への参画意識のないことと学習・研究テーマの目的を達成するための課題が山積していることをあげている。

つまり、自主グループの結成は、班員の自主グループへの参画意欲が班活動の的確な役割分担と責任ある活動へと結びつけば可能といえよう。

平成17年度の専攻科は、現時点では終了しておらず、平成17年11月から12月にかけて4回「学習・研究をまちづくりの実践に結びつけるための学習プログラム(NPO法人づくりの演習を含む。)」が残されている。これら学習プログラムを効果的に展開するなかで、班員と役員との取り組

みに対する考え方のギャップを乗り越え自主グループを編成する班が増えることが期待できよう。

おわりに

本研究は、松戸市公民館の館長と職員の方々やまつど生涯学習大学専攻科受講生の皆様のご協力をいただいたからすすめられたのである。特に、1班の金子雄二氏、2班の堺建氏、3班の松本源次郎氏には、ご多忙中にもかかわらずご尽力賜ったことについて改めて感謝する次第である。

にもかかわらず、本研究は未完の状態であり、本レポートも未完成である。それは、本稿をまとめている現時点(平成17年11月末)で、専攻科が終了していないからでもある。

今後、現在までの研究の成果を生かしながら、残された専攻科の学習プログラムに工夫を凝らし自主グループ結成への機運の醸成に取り組んでいきたい。その後、これらの

学習・研究活動を分析するなどして、自主グループ結成に関する課題や具体的な促進策についてより明らかにしたい。

参考文献

- ・「生涯学習の成果を幅広く生かす」(生涯学習審議会答申, 平成11年6月)
- ・「平成14年度社会教育調査報告書」(文部科学省, 平成15年1月)
- ・「松戸市基本構想」(平成9年12月16日議決)
- ・「2005生活カタログ」(松戸市役所総務企画本部政策調整課広報担当室, 平成17年4月)
- ・矢切公民館・青少年会館「平成16年度公民館事業報告書」(松戸市教育委員会生涯学習本部公民館, 平成17年3月)
- ・E. ハミルトン著田中雅文・笹井廣益・廣瀬隆人訳「成人教育は社会を変える」(玉川大学出版部, 2003年1月)
- ・鈴木真理著「ボランティア活動と集団」(学文社, 2004年2月)
- ・マルカム・ノールズ著堀薫夫・三輪健二監訳「成人教育の現代的実践」(鳳書房, 2002年2月)

別添資料1「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査」

この調査は、成人の皆様の地域活動を促進する学習活動のあり方を明らかにすることを目的としています。また、調査結果は、数値で表しますので、あなたのプライバシーを侵害することはありません。

どうぞ、この調査にご回答くださいますよう、宜しくお願いいたします。

平成16年10月27日
聖徳大学 教授 清水 英男

問1 あなたが、この専攻科の受講者募集を知ったのは、なにからですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

	回答数(%)
ア 市の広報誌から	16(66.7)
イ 公民館の広報紙から	3(12.5)
ウ 仲間から	1(4.2)
エ 公民館の職員から	2(8.3)
オ その他()	2(8.3)

問2 あなたがこの専攻科を受講した動機について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 自分の意思で参加した	21(87.5)
イ 仲間に誘われて参加した	1(4.2)
ウ 公民館の職員に誘われて参加した	2(8.3)
エ その他()	0(0.0)

問3 あなたは、地域活動(グループ活動、ボランティア活動など)を行っていますか。

ア 現在行っている	10(41.7)
イ 過去に行ったことがある	1(4.2)
ウ 行ったことがない	11(45.8)
エ その他()	2(8.3)

・町会行事
・社会福祉協議会の会員

問3-1 問3でアとイと答えた方にお聞きます。どのような地域活動を行っているのですか、また、行ったのですか。次の()の中に記入して下さい。いくつでも結構です。(問4へ)

<ul style="list-style-type: none"> ・町会の経営として行事に参加 ・グランドゴルフの指導 ・交通安全指導 ・高齢者支援センター ・近隣住民との交流会(勉強会, スポーツ) ・NPO福祉ボランティア ・学習ボランティアの会 ・特養ホームのボランティア ・身体不自由者通所授産施設
--

- ・サポートセンター運営委員
- ・観光大使
- ・絵手紙教室

問3-2 問3でウと答えた方にお聞きします。地域活動を行わなかった理由はなんですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア 忙しくて時間がなかったから	3(27.3)
イ 興味がなかったから	2(18.2)
ウ 地域活動の内容がわからなかったから	4(36.3)
エ 参加したいグループがなかったから	1(9.1)
オ お金にならないから	0(0.0)
カ その他()	1(9.1)

注) 問3でウと回答した11名を100%とする。

問4 すべての方にお聞きします。今後、地域活動に参画したいと思いますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア ぜひ参画したい	7(29.2)
イ 機会があれば参画したい	15(62.4)
ウ なんともいえない	1(4.2)
エ 参画したくない	0(0.0)
オ その他()	1(4.2)

問4-1 問4でアとイと答えた方にお聞きします。どのような地域活動を行いたいと思いますか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 環境保全に関する活動	7(29.2)
イ 社会福祉に関する活動	7(20.2)
ウ 体育・スポーツ・文化に関する活動	8(33.3)
エ 公共施設(公民館や図書館, 青少年センターなどのボランティアに関する活動)	2(8.4)
オ 募金, チャリティーパーティーに関する活動	0(0.0)
カ 青少年の健全育成に関する活動	3(12.5)
キ 自主防災活動や災害救護に関する活動	2(8.4)
ク 国際理解・国際交流に関する活動	2(8.4)
ケ 保険・医療・衛生に関する活動	0(0.0)
コ 交通安全に関する活動	3(12.5)
サ 市民の学習活動の支援に関する活動	7(20.2)
シ その他()	0(0.0)

注) 回答者24名を100%とする。(○印41)

問5 すべての方にお聞きします。あなたは、なぜ、現在専攻科で学習しているのですか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア	地域社会に役立つ活動を行うため	11(45.7)
イ	趣味を充実するため	2(8.4)
ウ	教養を高めるため	3(12.5)
エ	自分の可能性を探るため	6(25.0)
オ	その他()	2(8.4)

問6 すべての方にお聞きします。現在参画されている専攻科の学習は、役に立っていますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア	非常に役立っている	5(20.8)
イ	ある程度役立っている	13(54.2)
ウ	どちらともいえない	5(20.8)
エ	あまり役立っていない	1(4.2)
オ	まったく役立っていない	0(0.0)
カ	その他()	0(0.0)

問7 すべての方にお聞きします。現在の専攻科の学習で、問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

ご意見 ()

問8 最後に、すべての方にお聞きします。あなたの属性等について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

1) 性別

ア	男性	19(79.2)
イ	女性	5(20.8)

2) 年齢

ア	55歳未満	0(0.0)
イ	55歳以上60歳未満	0(0.0)
ウ	60歳以上65歳未満	4(16.7)
エ	65歳以上70歳未満	12(50.0)
オ	70歳以上	8(33.3)

3) 職業

ア	職業についている(フルタイム)	0(0.0)
イ	職業についている(パートタイム)	2(8.4)
ウ	職業についていない	22(91.7)
エ	その他()	0(0.0)

4) 班

ア	1班	8(33.3)
イ	2班	8(33.3)
ウ	3班	8(33.3)

ご協力有難うございました。

別添資料2「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査」

この調査は、成人の皆様の地域活動を促進する学習活動のあり方を明らかにすることを目的としています。また、調査結果は、数値で表しますので、あなたのプライバシーを侵害することはありません。

どうぞ、この調査にご回答くださいますよう、宜しくお願いいたします。

平成17年2月9日

聖徳大学 教授 清水 英男

問1 すべての方にお聞きします。現在参画されている専攻科の学習は、役に立っていますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

	回答数(%)
ア 非常に役立っている	5(26.3)
イ ある程度役立っている	13(68.4)
ウ どちらともいえない	0(0.0)
エ あまり役立っていない	1(5.3)
オ まったく役立っていない	0(0.0)
カ その他()	0(0.0)

問1-1 問1でア、イと回答された方にお聞きします。役に立った学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 集団により意思決定(グループワーク)の技法	8(44.4)
イ 集団により意思決定(グループワーク)の演習	9(50.0)
ウ 課題発見・解決型の学習方法	6(33.3)
エ 課題発見・解決型の実際の学習(演習)	8(44.4)
オ 現地訪問・体験型による学習の技法	6(33.3)
カ 現地訪問・体験型の実際の学習	6(33.3)
キ 創造性訓練(トレーニング)の技法	0(0.0)
ク 創造性訓練(トレーニング)の演習	1(5.6)
ケ その他()	1(5.6)

注) 回答者18名を100%とする。(○印42)

問1-2 問1でエ、オと回答された方にお聞きします。役に立った学習とはどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 集団により意思決定(グループワーク)の技法	1(100.0)
イ 集団により意思決定(グループワーク)の演習	
ウ 課題発見・解決型の学習方法	
エ 課題発見・解決型の実際の学習(演習)	
オ 現地訪問・体験型による学習の技法	
カ 現地訪問・体験型の実際の学習	
キ 創造性訓練(トレーニング)の技法	
ク 創造性訓練(トレーニング)の演習	
ケ その他()	

注) 回答者1名を100%とする。

問2 すべての方にお聞きします。今後、地域活動に参画したいと思いますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア ぜひ参画したい	6(31.6)
イ 機会があれば参画したい	12(63.2)
ウ なんともいえない	1 (5.3)
エ 参画したくない	0 (0.0)
オ その他 ()	0 (0.0)

問2-1 問2でアとイと答えた方にお聞きします。どのような地域活動を行いたいと思いますか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 環境保全に関する活動	8(44.4)
イ 社会福祉に関する活動	6(33.3)
ウ 体育・スポーツ・文化に関する活動	6(33.3)
エ 公共施設(公民館や図書館, 青少年センターなどのボランティア活動	6(33.3)
オ 募金, チャリティーバザーに関する活動	0 (0.0)
カ 青少年の健全育成に関する活動	6(33.3)
キ 自主防災活動や災害救護に関する活動	4(22.2)
ク 国際理解・国際交流に関する活動	6(33.3)
ケ 保険・医療・衛生に関する活動	3(16.6)
コ 交通安全に関する活動	0 (0.0)
サ 市民の学習活動の支援に関する活動	8(44.4)
シ その他()	0 (0.0)

注) 回答者18名を100%とする。(○印53)

問3 すべての方にお聞きします。現在専攻科の学習は、グループにより学習課題を設定し、その課題を達成するための企画や運営、評価のあり方をグループによって成し遂げる方法をとっています。この方法の問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

ア 方法全体に対する意見()	
イ グループ編成に関する意見()	
ウ 体験活動等内容に関する意見()	
エ その他()	

問4 すべての方にお聞きします。現在の専攻科の学習で、問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

ご意見 ()

問5 最後に、すべての方にお聞きします。あなたの属性等について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

1)性別

ア	男性	16(84.2)
イ	女性	3(15.8)

2) 年齢

ア	55歳未満	0 (0.0)
イ	55歳以上60歳未満	0 (0.0)
ウ	60歳以上65歳未満	4 (21.1)
エ	65歳以上70歳未満	9 (47.3)
オ	70歳以上	6 (31.6)

3) 職業

ア	職業についている(フルタイム)	0 (0.0)
イ	職業についている(パートタイム)	2 (10.5)
ウ	職業についていない	17 (89.5)
エ	その他()	0 (0.0)

4) 班

ア	1班	7 (36.8)
イ	2班	6 (31.6)
ウ	3班	6 (31.6)

ご協力有難うございました。

別添資料3「成人の地域活動にかかわる学習に関する意識・行動調査」

この調査は、成人の皆様の地域活動を促進する学習活動のあり方を明らかにすることを目的としています。また、調査結果は、数値で表しますので、あなたのプライバシーを侵害することはありません。

どうぞ、この調査にご回答くださいますよう、宜しくお願いいたします。

平成17年10月26日

聖徳大学 教授 清水 英男

問1 すべての方にお聞きします。現在参画されている専攻科の班別学習は、役に立っていますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

	回答数(%)
ア 非常に役立っている	1 (6.7)
イ ある程度役立っている	14 (99.3)
ウ どちらともいえない	0 (0.0)
エ あまり役立っていない	0 (0.0)
オ まったく役立っていない	0 (0.0)
カ その他()	0 (0.0)

問1-1 問1でア、イと回答された方にお聞きします。役に立っている学習とはどのようなものですか。次の項目も中から最もあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 集団での意思決定の実際が理解できたから	4 (26.7)
イ 課題発見・解決型の実際の学習ができたから	10 (66.7)
ウ 現地訪問等体験型による学習の技法が学べたから	8 (53.3)
エ 松戸市の良さを発見できたから	4 (26.7)
オ 班員と友達になれたから	8 (53.3)
カ 自分の班のテーマについて研究が深められたから	7 (46.7)
ク 今後講座が終了した後の方向が見えたから	0 (0.0)
ケ その他()	0 (0.0)

注) 回答者15名を100%とする。(○印41)

問2 すべての方にお聞きします。今後、地域活動に参画したいと思いますか。以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

ア ぜひ参画したい	2 (13.3)
イ 機会があれば参画したい	12 (80.0)
ウ なんともしない	1 (6.7)
エ 参画したくない	0 (0.0)
オ その他()	0 (0.0)

問2-1 問2でアとイと答えた方にお聞きします。どのような地域活動を行いたいと思いますか。次の項目も中から最もあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 環境保全に関する活動	8 (61.5)
--------------	----------

イ 社会福祉に関する活動	5 (38.5)
ウ 体育・スポーツ・文化に関する活動	3 (23.1)
エ 公共施設(公民館や図書館, 青少年センターなど)のボランティアに関する活動	2 (15.4)
オ 募金, チャリティーバザーに関する活動	0 (0.0)
カ 青少年の健全育成に関する活動	3 (23.1)
キ 自主防災活動や災害救護に関する活動	1 (7.7)
ク 国際理解・国際交流に関する活動	2 (15.4)
ケ 保険・医療・衛生に関する活動	1 (7.7)
コ 交通安全に関する活動	0 (0.0)
サ 市民の学習活動の支援に関する活動	3 (23.1)
シ その他()	0 (0.0)

注) 回答者13名を100%とする。(○印28)

問3 すべての方にお聞きます。この講座が終了した後に、各班がグループを作ったとしたら、あなたは参加しますか。

ア 積極的に参加する	1 (6.7)
イ できれば参加したい	11 (73.3)
ウ 参加するかどうかわからない	2 (13.3)
エ 参加しない	0 (0.0)
オ その他(グループ構想に賛同できたら積極的に参加する)	1 (6.7)

問3-1 問3でエと答えた方にお聞きます。参加しない理由はどのようなものですか。次の項目も中からあてはまるものすべての記号に○をつけてください。

ア 班の目的・活動内容などが自分にあっていない(興味がない)	0 (0.0)
イ 班の人間関係が自分にあっていない	0 (0.0)
ウ 忙しくて時間がない	0 (0.0)
エ その他()	0 (0.0)

問4 現在専攻科の学習は、グループにより学習課題を設定し、その課題を達成するための企画や運営、評価のあり方をグループによって成し遂げる方法をとっています。この方法の問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

ア 方法全体に対する意見 7(46.7)	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマの選定とグループ分けがあいまいであった。(2名1班) ・ 1回の時間を長くするほうがよい。交通費がたすかる。(1名2班) ・ 欠落者をなくすこと。(1名2班) ・ 取り組み姿勢をきちんと指示することが肝要である。(1名2班) ・ 大きなテーマに絞ってめいめいが選んだテーマでグループをつくったほうがよい。(1名3班) ・ 学習課題を決めるのに難しさがある。(1名3班) ・ 良い。(2班1名)
イ グループ編成に関する意見 7(46.7)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最初の編成がそのまま継続される方式は問題である。(1名1班) ・ 課題に対して希望するグループをつくるほうがよい。(1名2班) ・ 目的意識を持ってよかった。(1名2班) ・ ちょうどよい人員だった。(1名2班)

	<ul style="list-style-type: none"> ・参加意識が同じレベルでないとグループ活動の成果があがらない。個人プレーになってしまう。(1名3班) ・現状でよい。(1班と3班各1名)
ウ 体験活動等内容に関する意見 5(33.3)	<ul style="list-style-type: none"> ・3名1班程度がよい。(1名1班) ・テーマ設定に時間を費やし、意思統一に苦勞した。(1名2班) ・自由に活動できる時間が豊富でよかった。(1名2班) ・よかった。(1班と2班各1名)
エ その他 4(26.6)	<ul style="list-style-type: none"> ・研究課題を見つけるのが難しい。(1名1班) ・レポート作成のアドバイスが必要である。(1名2班) ・2年にわたり研究活動ができてよかった。(1班と2班各1名)

注) 回答者15名を100%とする。(○印23)

問6 すべての方にお聞きします。現在の専攻科の学習で、問題点や改善点などありましたら、ご意見をお聞かせください。

ご意見 11 (73.3)	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者の選別とグループ編成の手法に改善が必要である。(1名3班) ・課題を自由にするのはよいようで問題もある。(1名2班) ・テーマが大きすぎたと思う。(1名2班) ・問題点をどの程度調査するかが問題である。(1名2班) ・学習で得た成果を実施できるようにすること。(1名2班) ・テーマを(自由にするのではなく)主催者が決めて実施すべきである。(1名2班) ・テーマ設定に苦勞したので、中身の詰めが不十分になった。(1名2班) ・うまくいった。(1名1班) ・課題をもう少し幅広くすべきである。(1名1班) ・「専攻科は如何にすべきか」を一度全員が認識する機会をつくる必要がある。(1名1班) ・現地体験を今後も重視すべきである。(1名1班)
---------------	---

注) 回答者15名を100%とする。(回答数11)

問7 最後に、すべての方にお聞きします。あなたの属性等について、以下の項目の中から最もあてはまる記号1つに○をつけてください。

1)性別

ア	男性	15(100.0)
イ	女性	0 (0.0)

2)年齢

ア	55歳未満	0 (0.0)
イ	55歳以上60歳未満	0 (0.0)
ウ	60歳以上65歳未満	3(20.0)
エ	65歳以上70歳未満	5(33.3)
オ	70歳以上	7(46.7)

3)職業

ア	職業についている(フルタイム)	0 (0.0)
イ	職業についている(パートタイム)	2(13.3)
ウ	職業についていない	11(73.3)

エ	その他()	1 (6.7)
オ	無回答	1 (6.7)

4)班

ア	1班	4 (26.6)
イ	2班	7 (46.8)
ウ	3班	4 (26.6)

別添資料4「平成16・17年度まつど生涯学習大学専攻科『まちづくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて』班役員の感想・提言調査」

この調査は、講座終了後自主グループ活動を期待して開講した専攻科について、各版の役員を対象にして、いままでの班活動の感想と提言をお聞きすることを目的としています。

調査結果は、匿名・データとして処理しますので、あなたのプライバシーを侵害することはありません。どうぞ、ご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

平成17年10月26日

聖徳大学教授清水 英男

問1 初期の班別学習(平成16年10月27日から12月22日の5回)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 当時の班員グループとして全体の人間関係は、どのような状況でしたか。

イ 当時の班は、テーマ設定など目的達成への取り組みはどのような状況でしたか。

ウ 当時の班活動で、よかったと思われたことはどのようなことでしたか。

エ 当時の班活動で、問題と思われたことはどのようなことでしたか。

オ 当時、班の役員として、力を入れたことはどのようなことでしたか。

カ 当時、班の役員としての感想(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

問2 中期の班別学習(平成17年1月12月28日から6月8日の7回)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 当時の班員グループとして全体の人間関係は、どのような状況でしたか。

イ 当時の班は、テーマ設定など目的達成への取り組みはどのような状況でしたか。

ウ 当時の班活動で、よかったと思われたことはどのようなことでしたか。

エ 当時の班活動で、問題と思われたことはどのようなことでしたか。

オ 当時、班の役員として、力を入れたことはどのようなことでしたか。

カ 当時、班の役員としての感想(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

問3 後期の班別学習(平成17年9月14日から10月26日の4回)における班の状況や班員の意識、役員としてのあなたの立場などについて、下記の箇所に記入ください。

ア 班員グループとして全体の人間関係は、どのような状況ですか。

イ 班のテーマ設定など目的達成への取り組みはどのような状況ですか。

ウ 班活動で、よかったと思われていることはどのようなことですか。

エ 班活動で、問題と思われていることはどのようなことですか。

オ 班の役員として、力を入れていることはどのようなことですか。

カ 班の役員としての現在の心境(よかったこと、問題点など)を聞かせてください。

問4 講座終了後、あなたの班の方向についてお聞かせください。なお、回答された項目の下の()の中に、主な理由を記入ください。

ア 自主グループとして活動することが大いに期待できる。

(理由

)

イ 自主グループとして活動することが期待できる。

(理由

)

ウ 自主グループとして活動できるかどうか分からない。

(理由

)

エ 自主グループとして活動することが期待できない。

(理由

)

オ 自主グループとして活動することができない。

(理由

)

カ その他

(理由

)

問5 最後にお聞きします。あなたの所属する班に丸印をつけてください。

ア 1班 イ 2班 ウ3班

ご協力誠にありがとうございました。心から感謝申し上げます。

別添資料5 「平成16・17年度まつど生涯学習大学専攻科「まちづくりを楽しむ方法—まつど再発見に向けて」班役員の感想・提言調査結果」

具体的な調査結果については、以下の表の通りである。

質問項目	前半（平成16年の10月から12月の間）	中間（平成17年の1月から6月の間）	後半（平成17年の9月から10月の間）
班員の人間関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・60歳以上という共通点があり人間関係づくりに努力しているが、価値観の違いなどがあり、打ち解けられなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・世間話などは和気あいあいになり、互いに理解しあうよう努力してきた。また、目的意識が明確になるにつれ、班内でグループができてきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いの意見や考え方が理解しあえるようになり、仲間という関係がつくられた。 ・班員の一部がやめたことにより、やる気のある班員構成となり、進展した。
班の目的達成への取り組みについて	<ul style="list-style-type: none"> ・各自意見はさすが、班として集約し決定しようとする、合意法ではなく多数決で決めることが多かった。 ・しっかりと目的意識を持った班員が多くいたので、ポイントをはずさず時間をかけて全員参加で行動した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・意見を集約しようとする班員が少なかった。 ・議論を重ねるうちにまとまってきた。 ・班名が決定し、テーマが絞られ、研究の方向が見えてきた。しかし、それに違和感を持つ班員がいた。 ・全員がテーマに興味を持ち、まとまってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的な班活動として現地学習や資料づくりなどを行った。 ・各自が一生懸命に役割を果たし、活発に発言し行動するようになり、効果的な取り組みを行った。 ・自主的に行動する班員は少ないが、全員が同調するようになった。
班活動でよかったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・お互いが意見を出したり聞いたりして、テーマの深堀ができた。 ・多様な価値観が認識できた。 ・まつどの良さがわかった。 ・時間を延長して喫茶店で話し合った。 ・一度方針が決まったら協力する班員がでてきたこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・テーマにふさわしい講師の講義から、テーマの方向性が明らかになった。また、議論は白熱したが、方向性をみつけたので班員が一丸となれたこと。 ・楽しみながら体験学習ができた。 ・班員が、資料探しや現地学習には積極的に参画してくれた。 ・まつど生涯学習大学で発表ができた。 ・現地調査が効果的にできた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・班を3グループに分けて研究を行ったことにより、班員の和づくりと成果をあげることに結びついた。また、お互いの思いや意見が十分に行えたこと。 ・立派なアウトプット(成果)ができたという共通認識を得た。 ・リーダーのおかげで明るく楽しく学習ができた。 ・積極的に研究をすすめてくれる班員がいた。
班活動で問題と思ったこと	<ul style="list-style-type: none"> ・意見が違った班員が班を離れたこと。また、目標を理解し役割分担ができるような話し合いの時間が不足していること。 ・各係を一人の班員が一方的に決めてしまったこと。班活 	<ul style="list-style-type: none"> ・決定したテーマに不満を持っていた班員を納得させる方法がみつからなかった。ゆっくり議論する時間がなく、可能な範囲で意見の違う本人を巻き込んでいかざるを得なかった 	<ul style="list-style-type: none"> ・次のステップに向けての意見調整ができにくかったこと。班内のグループ活動にはばらつきが見られた。 ・意見はさすが資料作成への協力者而非協力者にわかれてしまったこと。

<p>班活動で問題と思ったこと</p>	<p>動の行き着く先が見えないこと。(出席できるか)健康上に不安があったこと。</p> <p>・連絡なしで欠席している班員への対応。班をNPO法人にするという捉え方ができにくかった。</p>	<p>・半数以上の班員が意見はいうが、作業をしなかったこと。欠席者対策。</p> <p>・やる気がなく、ただついてくるといふ班員が多くなってきたこと。宿題(役割分担した仕事)を忘れる班員が多くなったこと。</p>	<p>・「専攻科終了後の班をどうするか」という方向性を決定できないでいる。</p> <p>・反対はしないが自らの行動もしないでついてくる班員に対する対応。</p>
<p>班の役員として力を入れたこと</p>	<p>・全員に役割をもたせ、参画させること。係の仕事を実行に徹した。</p> <p>・班員が融和し何でも話せるよう心と心が結びつくように努力したこと。班としての意思決定ができるように努めた。</p> <p>・調査方法と纏めの方向性を明らかにすること。前回の学習や研究について復習し、継続性を持たせた。</p>	<p>・班活動を班員とともに行うことによって研究のターゲットを見定めようとしたこと。各班員が目的意識を持って同じレベルで活動するように努めたこと。楽しみながら班別活動ができるように配慮したこと。</p> <p>・デジタルカメラによる資料の作成。班員の役割分担と資料作成に努めた。</p> <p>・資料を整備することに努めた。</p>	<p>・まとめを完璧にしようとはせず、課題を残し、次の終了後の行動につなげようとしたこと。</p> <p>・欠落者をださないこと。まとめの資料の作成に力を注いだ。</p> <p>・資料の作成。班員の意見をまとめるために努力したこと。</p>
<p>役員としての感想</p>	<p>・班員同士の和をつくるためには、仲良くするだけでなく、お互いに理解することである。そのためには、お茶会や飲み会などの集まりが大切である。意見交換や相互理解の場が不足している。</p> <p>・全班員がテーマの内容がわかったこと。班員の小さな話題も尊重したこと。係制ではなく、責任と権限が明確な班長、副班長を置き、必要に応じて係を設置すべきである。</p> <p>・全班員で活動しようとして、計画がどんどんしぼんでしまった。</p>	<p>・カラオケや試食会などテーマに結びつく楽しい学習・研究活動を行うと、集団の維持機能や目的達成機能が高まる。班を地域単位に3グループにわけ活動したことは、個人意識の高揚に役立った。</p> <p>・プログラムに時間的余裕があったこと。</p> <p>・全員共通のプログラムの回数が多く、班別プログラムの収斂日時間を要した。</p> <p>・現地調査を重ねるごとに、班全員が一つの目標に向かう心意気を感じたこと。班員に対し連絡・報告・次回の予告などを伝えることに腐心した。</p> <p>・欠席者が多くなった。</p>	<p>・班活動に全員参画したこと。また、「参画してよかった、活動は終わることなく講座終了後も続ける。」などの共通認識ができた。終了後の活動に明るい未来を感じた。</p> <p>・班員と一緒に活動し、松戸市の良さが少しわかったこと。一つの目標に向かって学ぶ心確かめ合ったこと。</p> <p>・班別の研究テーマについては、全員共通の時点で、ある程度具体的な方向性をだす必要がある。</p> <p>・判別のテーマは、できるだけ早くある程度の方向性を示す必要がある。そのことによって、前期での終了が考えられる。</p> <p>・ある程度は個人の判断で率先して活動しないと目的は達成されない。自分の趣味が班全体の活動に寄与できたこ</p>

<p>専攻科終了後の班の方向性について</p>	<p>と。</p> <p>・A班の役員は、2名が自主グループとして活動することが期待できると回答している。その理由は、今後続けていく必要がある、また、松戸市でなにかをしたいという共通認識がある。しかし、具体化については検討を要することが多々ある、ということであった。さらに、1名が個人としては活動できると思っているが、班としてはまとめができた後で決定することなので、現在はわからないと回答している。</p> <p>・B班の役員は、2名が自主グループとして活動できるかわからないと回答している。その理由は、研究が終了したと考えている班員がいる。また、班活動を進める場合の資金づくりやテーマに関する関連行政や団体との交渉など課題が山積していることをあげている。また、1名は、班員の意識やリーダーなどの条件次第で継続化終了かが決まるとしている。</p> <p>・C班の役員2名とも、自主グループとして活動することが期待できないと回答している。その理由は、自主的に行動できる班員がいないことや講義を聴く程度の学習がよいと考えている班員が多いことをあげている。</p>
-------------------------	---